優秀賞

命のバトンをつなぐ

宮崎県立宮崎西高等学校１年 坂元 萌乃香

皆さんは臓器移植を知っていますか。簡単に説明すると、臓器の機能が弱まり、他の臓器と入れ替えなければ助からない場合に行う医療のことです。ほとんどの場合、取り換える臓器は亡くなった人から提供していただいた臓器です。正直私は、臓器移植の意味を知ってもあまり自分事として考えられませんでした。しかしそんな私の考えが一変したある授業がありました。それは中学3年生の時の道徳の「臓器ドナー」という授業です。先生と、クラスメイト全員で命と向き合った大切な授業でした。

この授業では主に二つの話が例として出されました。一つ目は、ある親子の話です。ある日娘が、「自分が脳死になったら臓器提供する？」と質問しました。それに対して母親は「お母さんはできない」と答えました。それは、親にとって子供はとても大切なものだからでした。脳死とは脳幹を含む、脳全体の機能が失われた状態のことを言います。脳死になると、もう回復することはできません。薬剤の投与などをやめると心臓が止まり亡くなってしまいます。しかし母親は、いずれ亡くなるのは分かっていても大切な娘を手放すことはできないという答えになりました。そうして娘の臓器提供に反対していた母親ですが、実はあるニュースを知っていました。それは、心臓移植を待ちながら亡くなった幼い女の子の話です。そのニュースのこともあり母親は、自分勝手ではないか、自分の考えは狭いのかと疑問を持つようになりました。この話を受けて、私は母親と同じ考えと気付きました。もちろん臓器提供をすると他の人を救うことができます。しかし、自分の子供の臓器を提供することはできません。この臓器提供するかしないかの問いに関しては正しい答えがあるわけでもなく、間違った答えがあるわけでもありません。私は、どちらを選択しても後悔や、安堵感、切なさは感じるのではないかと考えました。

二つ目は、医者の新見さんの臓器提供に対する思いについて書かれている話です。「妻が脳死になっても冷たくなるまで抱擁していたいが、妻が移植でしか助からないときには、移植を受けたい」と新見さんは言っています。また新見さんは「あげたくない。でももらいたい」とも言っています。私は、新見さんの意見に驚いたとともに納得しました。ほとんどの人がこのように思っているのではないでしょうか。「臓器を提供しないが提供してほしい」この言葉には、この人にどうしても生きてほしいという思いが、溢れるくらい含まれています。大切な人だからこそ、そう思うのは仕方ありません。私も新見さんのように思うかもしれません。しかし、そうすると助かる命も助からなくなります。今の現状、臓器提供を待っている患者が一万人をはるかに超えています。また、移植待機期間も非常に長く、一番期間の長い腎臓で14年9か月も期間があります。だから、移植を受けられる人数よりも移植を待ちながら亡くなっていく人数の方がはるかに多くなっています。私は、この現状をとても重く受け止めて改善策を考えなければいけない重要な問題だと考えました。日本は海外と比べて臓器提供数も移植件数もとても低いです。もちろん、移植手術がいか

に大変で多くの時間とお金、労力を使うのは分かっています。しかし海外との比較、今の日本の現状を踏まえて解決策を早急に出さないと救える命も救えなくなるのではと考えました。

この二つの話を踏まえて、最終的に「あなたは臓器提供することを希望するか」という問いに答える時間がありました。私はこの問いに対して、自分や家族含めて臓器提供をするというひとまずの結論に至りました。もちろんこの結論が変わることは大いに考えられます。しかし、中学3年生の私、高校1年生の私は臓器提供をするという結論になりました。家族を大切にしながらも、誰かを助けることの両立はそう簡単ではないと思います。しかし、誰か一人でも私の臓器提供で幸せになるなら私は臓器提供をしたいと思います。

私の将来の夢は患者さんの心を明るく笑顔に出来るような看護師です。将来医療に携わりたいと考えている私にとって、臓器移植の授業はとても心を打たれました。もし、自分が家族の臓器移植を決定するなら、自分の臓器提供意思表示カードに記入する時が来たら、と一つ一つの問いや二つの話と真剣に向き合い、自分事として捉えなければならないと考えるようになりました。また、担任の先生のドナー登録についての話を聞き、ますます臓器移植が身近に感じられるようになりました。私は、看護の勉強をするときに臓器について学ぶ機会があると思います。その時は、この授業で得られたことをもとに臓器提供と向き合っていきます。また、今の現状を少しでも良くするために臓器提供についてより知識を深めたいです。